

平成27年度千葉県産業教育審議会（第1回）審議結果

平成28年3月15日（火）
午後3時から午後5時まで
千葉県教育会館新館401会議室

【議事録】

○協議事項の説明（事務局）

- ・第2期千葉県教育振興基本計画：教育政策課
- ・第3次改革推進プラン（案）：県立学校改革推進課
- ・平成28年度高等学校入学者選抜について：指導課

本日は、今後の専門高校におけるキャリア教育の推進に向けて情報交換をしていただき、幅広く御意見をいただきたい。

○議長

本日は皆さんに一言でも御発言いただくという趣旨で進めたいと思います。
では、お願いします。

○委員

高等学校の入学者選抜の説明があったが、総合学科や職業学科で前期選抜は100%の枠を設けられるとのことで、私もその動向を気にしていた。近隣の職業高校を見ると、前期選抜枠を100%とする学校が多かった。近隣の工業高校の校長先生と話をしたとき、この子も良い子だから是非取りたいと思っても枠があって取れないことがあったとおっしゃっていた。後期選抜も是非受けてほしいと思うが、子どもの方が倍率を気にして、別の学校の方が受かりやすいと考え、進路変更することが今まで多かった。そういう意味では、100%になってよかったかもしれない。

また、キャリア教育というのも、学校としては進めて行くが、子ども達の生活経験が非常に薄くなっているのので、職業観の育成までなかなか行かない。具体的にこの職業に就きたいから、こんなキャリア教育を受けたいというところまで行かない。まず、「お勤めするってどういうこと」というようなところからやらなければならない。ですから、中学2年生の職場体験で、どの学校も3日ないし1週間の範囲で地域のお店や会社をお願いして行くことは行くが、どうしても販売業・サービス業が非常に多くなり偏りを感じている。中学3年生になると進路指導で進学の話になり、進学に重きを置いたキャリア教育になってしまう。

○議長

私もそのところを聞きたかった。いわゆるキャリア教育であるが、小学校何年生くらいから、本人から将来こうなりたい、こうしたいというような気になるものなのか。

○委員

小さい頃から、大きくなったら僕はサッカー選手になるとか、昔で言えば野球選手になりたいとか、小さければ小さい程、すごく夢を言いやすいと思う。本校では小学6年生で職場体験を必ず実施するシステムになっており、地域の行ける範囲で職場の体験をしたりしながら結び付けて行く。小学校の教育課程の中で言うと、4年生の時に1/2成人式を結構多くの学校で実施していると思うが、成人式の半分である10歳の時に、僕は将来こんなふうになりたいとか、こういう職業に就きたいなど、皆の前で表現する。また、6年生で卒業する時に卒業文集などに将来こういうふうになりたいとか書き、そこでもう一度考えさせることが多い。

○議長

野球選手になりたい、サッカー選手になりたいと言うのは分かりますが、具体的に例えば、大学に行ってロボットの研究がしたいとか、宇宙衛星の研究がしたい等が全然聞こえてこない。学校の生徒もそうですか。

○委員

自分は元々中学校の教員で、今は小学校で管理職をしておりますけど、自分の個人的な感覚としては、職業に対する夢を持っていたも、受験勉強の時には夢と切り離されて自分の実力がこうだから、ここの学校に進みたいとなっているところが凄く残念に思っている。自分のやっていく勉強と繋がっていかねばならないが、ある日突然そこが離れて別々になっている感じがする。一生懸命キャリア教育をしているけれど、受験とは別々という感じがする。

○議長

自分の孫を見ていると、親が何をやらせるだとか、何を勉強させるとか言わない。例えば東京だと、開成高等学校に入るのは中学校から入った方が楽だから、開成中学校に入れるために予備校に一生懸命通わせている。だから、キャリア教育という言葉が吹っ飛んでしまっている。そのような中でどのように結び付けて行くかが、一番の課題ではないかという気がする。入試制度もある程度行き着いてしまっており、現場は凄く苦勞をしていると思う。

○委員

小学生のうちには中学受験をしない子もいるので、割と将来はこういう人になりたいから、こういう所に行きたいと言うことが多い。中学校になると、パタッと繋がらなくなる。

○議長

だから、子供の頃、小さい頃に様々な事をやらせておいた方が良いと思う。例えば、職業課程でも音楽でも自分で作曲して一曲作れるくらいやってみる。保健体育もそうである。昔の高校入試では、英語は100点満点ではなく、職業課程と同じ50点満点だった。国語、社会は100点満点だった。昔、千葉は農業県でしたから、木更津から南の房州方面に行くと家業を継ぐ人が多い。だから、木更津周辺では英語は必要ないと考えている人もいたが、木更津高等学校へ行けた。それと、家庭科等と点数が一緒のため、同じ程度に勉強ができる訳である。様々なことをやっていた方が、キャリア教育で何かを決めてしまうよりは、将来に役に立つと私は思う。そこが一番大事な所だという気がする。

○委員

私もそれがとても大事だと思っているが、私が初めて教員になった頃は技術・家庭科は1年生で70時間、2年生で70時間、3年生で105時間あった時代で、男子で言えば木材加工1及び2、金属加工1及び2など、すごく時間を掛けていろんなことをさせてあげることができたが、男女統一教育課程になって半分以下になった。尚かつ普通教育における技術・家庭科という形になったので、どちらかというと産業を評価するための学習だとか、生活のための学習だとか、そちらの方に指導が傾いてきていて、実際に自分の職業として、木工が好きだから木材関係に勤めたいとか、機械関係が好きだから機械のことをやりたいとかという子が出づらな環境になっている。進路指導でも本人、保護者も色々なリスクを考えて普通科に行きたいという気持ちがまだまだ強い。工業高校に見学に行くと、小人数で良い設備を使って一生懸命色々な事をやってくださっているが、その状況を説明しても、やはり本人と保護者からはどこでも良いから普通科の入れる所に入れてくださいという意識になっている。

○議長

現在、工業高校、商業高校にいる生徒の割合はどのくらいか。私の時代は半分も普通科に行かなかった。今は、ほとんどが普通科に行くんじゃないか。

○委員

全国では約2割、高校生全体の約2割が専門高校に在籍している。
千葉はもうすこし少ない。千葉県は普通科の割合が非常に高い。

○議長

千葉商業高等学校を出て、千葉商科大学を受ける生徒も多いでしょう。

○委員

学部によって差はある。商と経の商経学部が3学科あるが、その内の商学科は高校の商業科出身者が約6から7割。これは中学校の先生方は御存知ないかと思うが、千葉商業高等学校や千葉工業高等学校になると、恐らく大学進学率は相当高い割合で、変な言い方であるが、千葉商業高等学校や千葉工業高等学校よりも進学率が低い普通科高校がかなりあるのではないと思われるくらい、今では商業科や工業科からの大学進学が、しやすくなっている状況にある。それを中学校の先生方は御存知ないと言うよりは、保護者の方が御存知ないのではないか。千葉商業高等学校に入れたら、昔のように就職しなければならないというように思っていると思う。恐らく、千葉商業高等学校からの大学進学率は50%位なのではないですか。

○議長

越えているのではないのでしょうか。

○委員

大学かは分かりませんが、千葉商業高等学校は7割位が進学だと思う。

○委員

専門学校と大学を合わせると、70%越えると思う。ほとんど8割近いと思う。

○議長

親も本人もそう思う人が多い中で、教育庁としてどういう施策をするかということですよね。そこは中々難しいですよね。

○委員

今、看護の方も2025年問題があり、看護師が不足しているということで、110万人を目指して看護学部がかなり増えて来ている。隣の東邦大学では来年から看護学部ができる。

○議長

看護学部は4年ですか。

○委員

4年です。

○議長

前は2年でしたよね。

○委員

幕張総合高等学校は高校が3年で専攻科が2年。最短コースで正看護師になれるコースになっている。実習もあるためタイトである。

○議長

それは、大学の4年制看護学部卒業しても、就職後の待遇は同じなのか。

○委員

いいえ、やはり4年制大学を出た子の待遇が若干良い。

○議長

あの社会も変だよな。気の毒だと思う。2年制を出た学生は、看護室の主任になかなかない。主任になれないと言うことは給料が安い。差が付いてしまう。今時珍しい。学歴で差をつけるなんて。お偉方の気持ちが分らない訳ではないけれど、例えば、千葉銀行の女子行員採用は、殆ど4年制である。その中で若干短大卒がいる。その状況を親が見てしまうと、短大では銀行に入れないと考えてしまう。この部分に職業教育を教える側と受ける側で、かなりのズレがある。製造業は、工業高校卒業生は多いですか。

○委員

多いです。現場で働いていただいている社員の約7割が工業高校の卒業、残り約3割が4年制大学、一部商業高校、普通科の卒業生である。工業高校を出てくると、普通科や商業科の卒業生と比べると、理数系の科目に対して忌避感がありませんから、入社後、オペレーションや設備の保全等の教育を受けるときに、教育のプロセスの中で非常に定着が良い。大学4年制もベースはやはり工業系です。

○議長

川鉄さんは日本のトップ企業だから、学歴を結構見るんです。だから、高卒で現場に入るとなかなか課長になれませんよね。まして、役員にはなれないですよね。そう言うのがあるから、親からすると・・・

○委員

今申し上げたのは、製鉄所で同じ現業系の仕事についていただく現場社員の約3割位は高卒ではなく、4年制大学等の出身者であり、同じ職種についている限り学歴の差は処遇に関係ないということ。入った後の立ち上がりは、4年制大学を出た方が早い。知識の吸収も早い。ただ、10年・20年たった時に差が残っているかというと、そうでもない。

○議長

業種によって違うんですね。銀行なんかは反対です。差別しない前提ですから、高卒で入って、大卒の22歳に並ぶとそこから査定が始まる。そうすると高卒は4年間業務をやっているから、大卒がかなう訳がない。だから、高卒の方が早く偉くなる。学歴で差をつけないということは、非常に大事である。男女比についても新聞に沢山出ていますけど、千葉銀行には女性管理職が多い。処遇で差別化しないという一つの風土がある。

○委員

勘違いされているようですが、我々は現業職で採用した場合には、大卒、高卒の学歴で処遇に差はない。先程申し上げたように、立ち上がり具合は、大卒の方が知識の吸収が早い。やはり大学4年間の教育は大きいと思います。ただ、長いことやっていくと、例えば中堅社員くらいになると、学歴間の実力差は集団を比較すると無くなり、当然、処遇も変わらない。

○議長

突き詰めて行くと教育論のようになってしましますが、そこでここに法律があるじゃないですか。昭和27年に産業教育法ができたんですよ。これ昭和27年だよ。みんな生まれていないんだよ。だから、いつも言っているんだけど、その法律を依然としてやっている役所の神経が分らない。千葉はできないですよ、国の法律ですから。そのような事をどんどん文部科学省に言った方が良いですよ。だって、昭和27年を知っている人いますか。昭和27年は本当に食べるのに困っていたんです。日本中が食べるのに必死だったんです。貧しいから、何とか皆で頑張って、それでいろんなものを作って世界に売り込もうという発想だったんです。今はJETROと言っていますが、貿易振興会なんかそういうところから始まっている訳です。96歳になる母親がこう言っていた。日本は戦争で、何も無くなってしまった。だから、残るのは教育しかない。もしもお前が、商人の後取りでも勉強したいと思ったら、いくらでも勉強やっていいからと言われた。家の後を継ぐより良さそうだから、勉強をやることにしたところ、家庭教師を付けてくれた。当時、小学校1年か2年で家庭教師を付けるなんて珍しい。でも勉強をやれと言う。それで、別に大学に行くとかではないんです。とにかく勉強しなければだめなんだという、そういう思いでやった。それで、小さい頃からやっていたので、勉強が嫌になる。高校時代になって、卓球で入れてやると言われれば、それで進学してしまう。だから大学で4年間卓球をやっていたんです。

その後、中央大学経理研究所の夜学に行きました。何か資格を取ろうと思い、公認会計士コースを受けたが失敗した。キャリア教育をどうやって行けば良いかわからない。

○委員

私は、農業しかやって来ていない。食農教育ということで、農業を通しての体験に何年か目を向けている。体験するのは小さい子からお年寄りまで幅広いが、その間の中学生、高校生、20代位の人が抜けている。小学生は本当に楽しそうに、もっと小さい子供たちは元気に畑の中を走り回っている。たまに、知的に障害のありそうなお子さんも来られるが、一年経つと成長がすごく良く分かる。若い人たちが少しずつ地域に返って来て就農している。その若い子たちが学校と連携して、近くにファームを借りて何かできないかというような動きがある。本当に小さなことだが、そのような動きを大切にして、私たちリタイア組がバックアップして行くのが、大事なのではないかと感じている。

○委員

茂原農業高等学校と茂原工業高等学校が統合した茂原樟陽高等学校は、創立10年目になる。私は畜産の教員として、茂原農業高等学校でも勤めさせていただいて、今の校舎に22年いることになる。食農教育で今年、県から指定をいただき小学校と連携を行った。その中で、教員に言ったのは生徒を連れて行ってくださいということで、生徒を必ず小学校に派遣するようにしました。そこで、着ぐるみを自分たちで作ったり、仮面を被ってみたり、そうしながら作物の作り方を教える形で先生役になることが、子供たちの学習の再認識になるので、それを中心にやるのが高校生にプラスになり、大事なことであると考えている。高校側から見ると、生徒がどのくらいできるのかという尺度を社会に示すことが重要なことと思う。それともう一点、農業科には女子生徒が増えている。全国平均の約5割に近づきつつある状況の中で、女子の力をどのように発揮して行ったら良いかと考える必要がある。昔、商業高校は女子が非常に多かったが、農業高校でもそのような形になりつつあるので、その女子を地方の中に残す手段を作れば、そこに男子が付いてくる。そうすると、そこにコミュニティができる。それと農業の6次産業化と盛んに言われるが、6次産業を一人でやることはできない。ですから、小さなコミュニティを作って、ものづくりの得意な人や牛を育てる人、稲作をやる人、ヨーグルトを作る人、ジャムを作る人というような、地域の中でのコミュニティができれば、もっとそういう意味での地域の創生というのが、少しずつでもできていくと思っている。先ほどの食農教育の話は非常にありがたい。

○議長

今のような貴重な意見は、教育庁も取り入れたら良いですよ。学ぶことに興味を持つということがものすごく大事であり、それもキャリア教育の一つだということでやれば、教える方も一生懸命教えられるし、聞く方も聞く。是非入れていただきたい。

○委員

私どもは労働行政となりますので、学校との関わりは学卒者の方々の就職という部分が一番の接点である。工業高校は就職率がいい。その他の普通高校の就職も、今は景気が良いからいいが、就職を希望する生徒を100%就職させることを目標に頑張っている。それ以外に離職率という問題がある。かつては7・5・3と言われて、中学卒で7割、高校卒で5割、大学卒で3割が3年以内に離職した。今は高校卒業生の離職率も4割位に下がってきているが、その辺の離職率を下げるために、就職活動時点だけでなく、それ以前の学校教育でのキャリア教育やインターンシップであったり、職業講話であったり、就職ガイダンスであったり、いろんなことを通して労働法関係の基本的な知識の講義等もしながら、社会に出て自立できる一助になればと実施している。その部分でキャリア教育と関わりを持っている。インターンシップもずっとやってきていて、最近ではHPで受入可能事業所等の情報提供をしているが、だいぶ広がりを見せてきている。

○委員

どの観点から話せば良いか考えているところですが、今の流れから、我々の会社に入って来ていただける採用という観点からお話しする。本年度もありがたいことに2,800人の新入社員をこの4月1日に迎える。先程、普通科なのか職業科なのかという話があったが、弊社では、共に働いている同僚や上司が、どの大学の出身者が全く知らない。すなわち、弊社では、入社する段階から人材をリストアップして管理をしていくんですが、その中に大学名というのは一切入って来ない状況です。今、行っている採用においても、どちらかという大学名よりも専門学部であったり、専門学校であったり、プロフェッショナルの人材が弊社に来ていただきたいと考えている。そういった専門性を非常に求めている。では、どのような専門性が弊社においてはありがたいのかというと、第一にIT、デジタル関係です。それから財務関係や金融。金融というのはイオングループにおいては、デベロッパーでしたり金融でしたり、そういった多種多様な業種があり、その全てにおいてCFOが必要です。弊社は300以上の事業会社がありますので、うちのグループで不足しているのはCFOということで、財務系列の修学をされている学生に来ていただきたい。それから、薬学、農学、工学、こういった学部の専門性を修めた学生に来ていただきたいのが第一です。従って、特に大学であるとか、高校であるとか、そういうところではないと思っている。

○議長

良い会社ですね、それが一番です。

○議長

どこの大学だとか、何番で入ったとかが付いて回る。特に酷いのは役所です。固定してしまうから駄目なんです。採用試験何番で入ったとかずっと付いて回る。そうすると下の人は大変である。本当はそうでない人の方が伸びている可能性がある。人事をやる立場からすると、そういう考えは捨てた方がよい。私も人事をやっていたが、白紙から人を見ようという気持ちは強かった。企業がそういうことをやらないと、いくらキャリア教育をやったって、大学に行かなくてもと言ったって駄目なんです。その方が大事なんです。

○委員

キャリア教育は私の専門なので、いろいろ申し上げたいことがある。今、話題になっているキャリア教育は、職業キャリアについての概念として話題になっている。キャリア教育でのキャリアとは、職業人としてどう生きて行くのかという問題だけでなく、地域社会の一員とか家庭の一員だとか、親として子としてどう生きて行くのかと言うことをひっくるめた意味でのキャリアのこと。キャリアを総合的に見たうえで、人はどう生きて行くのかというのがキャリア教育の課題。だから必ずしもキャリア教育で対象にしているのは職業キャリア問題だけではなくて、人としてどう生きて行くのか、家庭人として、地域社会の一員としてどう生きて行くのかというのも、キャリア教育の課題になると思います。

今までの議論をお聞きして不思議に思うのは、もう既に日本の社会も産業構造だとか職業構造が相当変わって、特に様々な産業界の変動もある中で、かつてのような学歴的な社会がかなりなくなってきたというのが定説だと思っている。かつてのような学歴神話が崩壊している中で、良い会社に入れば一生安泰という社会ではなくなっていることを前提にして、どう生きて行くのかをキャリア教育で問う

としているということなんだと思っています。ただ、それがなかなか学校の先生や保護者のところまで届かないという中で、まだ神話が生きているのかなと思っている。第三次産業が6割以上を占める中で、先進的な採用の在り方として学歴などに頼っているのは生き残れない社会になっているにもかかわらず、何故神話だけ生きているのか。

カナダのキャリア教育を見ると高校での最初の勉強は神話の打破、これがキャリア教育の最初にある。その上で、あなたどう生きていくの、どういう職業に就いて生きて行くの、自分の能力をどういう所で発揮していくの、と言うことを問うのがキャリア教育だと思っています。

産業教育振興法が昭和26年にできて、これは戦後の経済復興、人材育成の面からいかに支えるかということで、学校教育に期待を示した法律だったと思います。この時代の専門高校の教育というのは、全国的な規模で、いかに優秀な産業人材を育てるかと言うところに職業教育、産業教育の使命があつて、それを支えるものとして産業教育振興法があつた。今でもそうだと思いますけど、農業とか工業の先生方は給料が10%増すとか、その中で日本の経済復興支える人材を育てて行こう、手厚く育てて行こう、また、産業教育振興法に基づいて、その専門高校には手厚く施設設備の補助をしていこうと、別予算をたてた。そのようにして一定の役割を果たしてきた。ただ、補助制度は全て交付金に含まれるようになってしまったので、だんだん産業教育振興法の当初の意味がなくなって来ている。

その中で専門高校のキャリア教育を含めて、今後どのように教育をしていったらいいのかということですが、先ほどのお話にもありましたが、これからの専門高校の教育、キャリア教育として、どう生きて行くのかという問題も含めて、地域の専門高校であるべきだ、地域の職業教育であるべきだと思う。茂原の農業、工業、商業高校が茂原に根ざして教育をやっていかなければいけないと思っている。千葉県民としてのアイデンティティを持てる郷土愛があつて、そしてその地域に何ができるのか、その地域で自分がどう生きて行くことができるのかということのをベースにして、広い意味でのキャリア教育を進めて行くべきと考えている。

今、キャリア教育に課せられているミッションは2つあり、一つは将来、社会人、職業人としてどう生きて行くのかという側面と、もう一つは社会人、職業人として生きて行くことについて、学校でこの勉強することの意味や大切さを理解したうえで、勉強に意欲を持つ取組をしていこうということです。この二つを専門高校の教育に結び付けていくと、例えば商業科でこういう勉強すると自分は将来こんな資格を取り、職業に就くことができるんだと言ったような、自分のやっている勉強と将来の見通しを結び付けた上で、商業で頑張ろう、商業で勉強すれば大学にいけるのではないかと、大学に行った上でこういう職業に就くことができるんだ、もしかしたら某企業に入れるのではないかとというような、今やっている勉強と自分の将来、職業、生き方を結び付けて、専門高校で勉強することの意義や大切さを見出していけるように専門高校でやっていくべきだ。

専門高校に行ったら大学に進学できないなんて時代はとっくに終わっていますので、そのことも含めて、商業高校、工業高校の勉強が自分の将来のどこに結び付いていくのか、そういうキャリア教育がこれから大事だと思います。

○議長

親とか周辺がどう変わってくれるか。

○委員

もう一言、冒頭の挨拶の中にあつたように、千葉県の専門高校の教育成果をもっと広く、中学にもパンフレットとして出すとか、できないものかと思う。各学校の活躍があまり知られていない。もったいない。

○議長

日本の風土みたいなものを変えなければならない。大学に行かなければだめだとか、いったん会社に勤めたら、ずっとそこにいるだとか、日本人が一番遅れているところ。アメリカに2年間留学していた親戚がいるが、職業を変えることは何とも思っていない。これはアメリカ流になってしまっている。僅か2年しかいないが、今では会社の社長と経営コンサルタントの2つをやっている。そういうことを全く気にしない。日本全体の風土が変わって来ないとこのままずっと残る気がする。

副会長、まとめてください。

○委員（まとめ）

本日は忌憚の無い御意見をありがとうございました。私は農業ですが、今年は産業関係高等学校連絡協議会の会長をさせていただいている。先程ありました、もっとPRできないかということについては、大きな事業の一つとして、産業教育フェアを、昨年度からイオン幕張新都心をお借りして、10月の土日の2日間かけて特別支援学校も入っていただいて開催した。そのような形で、広く県民の皆様にも専門高校の魅力を発信しているつもりですが、まだまだ浸透していない。ただ、先ほどの発言のとおり、

入試の制度が変わり、専門高校でやってみたいという生徒を前期選抜で100%とれることになったので、そういう生徒を一人でも二人でも多く受け入れて、いわゆるキャリア教育を進めながら社会貢献を一人でもできるように子どもをつくるというのが、専門教育の大きな役割になっている。ドイツのデュアルシステムとは違うかと思いますが、日本版の形で伸ばせる方向がまだ残っていると思っている。私が一番好きな言葉が「多様性」で、全て同じではいけない、色々な所で、色々な形で、色々な関わりを持っていくことがキャリアではないかと思っている。本日のお話を聞かせていただいて、非常に参考になりました。自分の学校運営にも役立てて行きたいと思っているし、御縁ですので、今後も御指導いただければと思う。

○委員（意見）

先程、学歴神話が崩壊したにも関わらず今の状況は何なんだとのことだった。ただ、高校生が大学に行きたい、親が行かせたいと思う気持ちは良く分かる。少なくとも、職業の選択を4年間保留できることは意外と大きい。高校を卒業した時点では、自分にどういう職業に適性があるかわからない。もう一つは大学に行った方が、選択肢が広がる。かつ、いわゆる有名大学と言われる大学の方が、良好な就労機会に接する可能性が高くなる。誤解して欲しくないが、会社に入ってしまうと、大学はまったく関係ない。実力の世界である。

世間で認知されている企業にもし行きたいのであれば、世間で言われる一流大学に入った方が入りやすい。これは現実であり、就職活動をやっている子どもたちが実感していると思う。良いことだとは思わないが、これが現実です。そういう現実があって、キャリア教育がどうなるか考えていかなければならないと個人的には思う。キャリア教育は非常に難しく、なかなか実態を掴めなくて、社会に出てどういう社会人として生きて行くのかを考えさせる教育なのか、あるいは自らがどういう職業に適性があるか、何がやりたいのかを考えさせる教育なのか、ある種、社会で役に立つような技術・技能・知識を身につけさせて行くことが大事な教育なのか、この辺が混然一体となった感じがキャリア教育を語るときにキーになって、どこに焦点をあてるかということは、キャリア教育の議論によって変わってくる。例えば、キャリア教育を語る時に、就業機会をある程度学生に与えてみて、自分のやりたいことや、就職しようとしている会社が本当に自分に合うかどうかを試させている。これは発想としてはよく分かるのですが、インターンシップに代表されるような就業体験では期間があまりにも短い。正直、その会社が合うか合わないかなどは、働いてみないと分からないと思う。長期間アルバイトをやっても分からない。その社員になって人間関係の中で揉まれて、実務を経験して初めて合うかがわかる。そういう中で、インターンシップなどはキャリア教育の中のひとつのキーとして、個人的には必要以上に、実態以上に重視されている感じを受ける。ついつい教育を語る時は夢を語りがちだが、もう少し現実がどうなっているかを踏まえた議論を展開して行く必要がある。

○議長

キャリア教育というと幅が狭いかもしれない。広い意味で教育をどう考えるかが大事かもしれない。教育庁の皆さんには、それを実践していただければと思います。審議会の話は、規則だとかを飛び越えて話した方が色々な話が出るのかもしれないなと言う感じがした。今日は御協力いただき、ありがとうございました。

（事務局）

本日は多岐にわたる御意見及び課題等をいただき、誠にありがとうございました。こちらを持ち帰りまして、整理して議事録としてまとめさせていただきます。そしてこの内容につきまして、産業教育やキャリア教育の活性化を図れるように、各学校等に広く情報を発信してまいります。ありがとうございました。